WASON
HQ
1104
J74+

Aug. 1891
no. 276

女學雜誌

第二百七十六號 明治二十四年八月一日發兌

非戀愛を駁す　批評

吾黨の改革事業

痛憤の中、信念高烈にして自から餘裕綽々、希望確固、未だ成就せざるに遠く感謝の辭ばあり。

腹中蛇　新小説

下六番町六番地
女學雜誌社

CORNELL UNIVERSITY LIBRARIES

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 276 AUGUST, 1ST. 1891.

EDITORIAL:—The True Reformation.

CHILDREN'S COLUMN:—"Little Lord Fauntleroy." (A Translation.) S. W.

THOUGHTS AND FANCIES:—The Judgment of the Almighty No. II.

NOVELS:—"The Snake in the Heart" (A Translation.) S. S.

MISCELLANEOUS:—Mrs. Kineya Roku, the Late famous Shamisen player. A poem (Unposhi). An Enquiry about French Novels. "The Japanese Women," by Miss Ackerman.

CRITICAL NOTES:—"Hi-Ren-ai" (Anti-love Theory).

NOTES AND NEWS.

QUESTIONS AND ANSWERS.

CONCERNING WOMEN.

第二百七十六號目次

●社說　吾黨の改革事業

●隨感　全能者の審判(方寸子)

●兒籃　小公子(若松しづ子)

●雜錄　杵屋六女(ひさご)○偶成長歌一首(宝峯子)○翻譯新假名つゞり(杉森此馬)○佛國の小說○日本婦人を懐ふ

●批評　非戀愛を非とす(撫象子)○千代見草○湊分船○進歩の燈○壬申の亂。

●小說　腹中の蛇(湘川漁夫譯)

●時事　新官制○新東京府知事○小女學資○廢娼論○風俗取締○刺客○夫婦教員○私立校○信任投票。

○女報

The following is a brief sketch of the Changes recently made in the Girls' School of the Episcopal Mission.

The Girls' School under the Episcopal Mission has, like all other mission schools, been under the superintendence of the missionary teachers sent from the American board, who conducted the school, assisted by the Japanese teachers. We all know that those missionary teachers are generally devoted to their work of educating Japanese girls, and their patient labor has done a great deal for this country. However the Japanese teachers connected with this institution had, for some time, felt the necessity of a change in the administration as those foreign teachers, like many others sometimes fail to understand the people and their work of love often falls short of its Aim. At the same time, they knew that unless the Japanese themselves were ready to vouch safe the support of the institution, the necessary reform could not be made. With a view to collecting a permanent fund for this purpose, they formed themselves into a little band and by giving up a part of their monthly salary and working out of school hours, togather with the contribution from outside, they have already in hand a little sum. They went on faithfully with their work under the foreign teachers, still developing their plan and waiting for the time when they can lay it before their foreign friends and work it out for the improvement of the school. Finding an opportunity when Bishop W. H. Hare came out to this country for a visit, they told him what they thought were the drawbacks to the further usefulness of the institution, gave him their plan of reform, telling him of their desire to be allowed either an equal right of administration with foreigners or else to be allowed the right of conducting affairs. At the same time, they promised that if the latter plan be taken, they were ready to sacrifice all self interest and serve without pay in the cause. The Bishop answered that the missionaries were sent to educate Japanese as good Japanese and not as good Americans and that all necesary advice must of course be sought of the Japanese; but as to what shall be actually done, he said he would decide later. In the meanwhile, he attended the examinations, and himself asked questions on foreign subjects in English, and on the other hand he had his interpreter ask questions of them on similar Japanese subjects, and noted that they were not as ready with their answers on Japanese subjects as on the foreign. He went to their graduating exercises and was struck with the proficiency that the pupils had gained in writing and speaking the English language and concluded that the knowledge was cultivated in advantage of some useful Japanese studies. He noted down all those facts and at last summoning the head of the Japanese teachers, announced to him his new plan. The chief points were the following. I, that the Right over the Building should be made over to the Japanese. II, that of the Board of Councellors to be chosen by the Bishop and to be 4 in number 2 should be Japanese. III, that the teachers should be chosen by the Japanese with the permission of the Bishop; that 1 foreign lady teacher would be sent, paid by the Board, to attend solely to teaching and to have no duty outside of school hours; and, that the relations with the church and the Board will remain as they have been hitherto. Besides, the school will appropriate monthly the sum of $35 to help pay the teachers' salary and sundry other expenses. This plan is to be tried for one year, Mr. R. Osuga and others being committed with the charge.

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第十五卷 第二百七十六號 明治二十四年八月一日發兌

社説

吾黨の改革

代々の雜書隨筆類を通讀せよ。中に過古を忍び、當今を歎くの文章を存せざるもの、殆んど稀なり。斯て、安政時代の著者は天保を慕ひ、天保の著者は、明和時代を慕ふ。殊に知らず、わが痛歎して天下果して如何んと憂慮したるの時世は、即はち後人をして反つて之を理想とせしむる所ろの黄金時代にてあるとを。但だ通じて其慣慨する所のものは、常に、世情の日々に浮薄に流るゝを歎じ、先の時代の質直朴實にして當世に優るあるを羨やむにあり。

啻に、雜書隨筆中の小文人のみ、然く之を感ずるにはあらず、大凡そ、時務に慨し、言はざるを得ずして、直言上諫する所ろの烈士忠臣が聲は、常に亦た、世の追々に澆季に流るゝを痛み悲しむの聲あり、云く、昔しは云々にして、今の如くならざりきと。而して、其の斥ぞけて「今」と云ふ所ろのものは、后人をして望みて「昔」と謂はしむる所ろのものたり。斯て、昨日は今日より優り、今日は來日よりも優れりと云ふ。

吾等が老翁屢ば嗟歎して云はく、余が若き比ろは、風俗斯々ありき、今の如く浮薄ならず、余が壯んなる比ろは、民情斯々なりき、今の如く輕薄ならずと。而して、其の歎斥の語は年を重ぬるに隨がいて切なり。其音聲いよ〳〵枯るゝに隨がひ、其不平の調ます〳〵高し。

試ろみに吾等各自、わが一身に省問すれば、われは云く、風俗日々に廢れ、人情日々に薄し、余が學窓に出たりし比ろは、天下尙ほ篤朴ありき、余が初めて社會に出でたる比ろは、事業の人斯程迄に狡猾ならざりき。然るに、今や世は一日一日に退歩し、人は一日一日に墜落す。前途の景勢果して何如があらんと。

去つて之を新聞紙に問へば、新聞紙は一齊に論難すらく、文物は大ひに開けたりと云へど、人心は日々に、陋猥なり、今の紳士は古しへの武士の如くならず、今の婦人は古しへの貞婦の如くならず、今の大臣は古しへの大臣の如くならず、今の先生は古しへの先生の如くならずと。沈痛慷歎の調尤とも切

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

なるものに就きて之を聽けば、是ぞ、今を憤ふり昔を慕ふの聲の尤とも烈しきものにてありける。

スペンサー曰く、社會は日々に進歩すと。ベーコン曰く、黄金世界は、過去の世にあらずして、將來の世にありと。左れど、最とも確實なる證者は皆な然あらずと云へり。黄金の世は過去にあり、其光明日々に消え行くが如しと云へり、社會は日々に退歩し、人心は漸やくにして禽獸に近づくと云へり。之を文章に問ふに、文章は然なりと云ふ、之を老翁に問ふに、老翁は然なりとうなづく、之を新聞紙に問ふに、新聞紙は然なりと論ず、之を吾に問ふに、余が經驗は絕叫して、然なり然なりと證す。

左らば世は、日々に惡に墜落する乎。敎育者は、晝夜思を焦して人を發育せんとを勸む、而して人は皆な獸とならんとする乎。改革者は、悲憤慷慨して、善風を勵まし、疾聲大呼して、惡習を打破罵倒しつゝあり、而して世は追々に蠻野に趣きつゝある乎。

人の未だ書を讀まざるに當りては、天下の事易々たりと思惟せり。少こしく文字を知るに及びて、憂患胸に轟ろき、所思多くは成らず、人事の極めて復雜難澁なるとを悟る。此に於てか、書窓の人俄かに老化し、世上の事自づから大勢存す、事勢一と度び到らずば万事成るとなしと觀念發心するなり。爾來その爲す所ろは、時勢の奴たるにあり。

年少氣鋭にして、首べを擧げ、國家の現況を察視すれば、慨歎に堪へざるもの多し。則はち奮然として立ちて云はく、天の余を生ずる偶然にあらず、今は正に革命の時機なりと。赤手を揮ふて狂亂怒濤の中に泳ぎ、一身を進めて暴雨怪風の裏に躍る。壯志隆んなりと謂つべし。暫らくして、波の彌よ高く、風のいよ〳〵暴く、雨のいよ〳〵重きに會して、精神稍やく勞衰す。則はち嘆嗟して云はく、革命は人の手を以て造ると能はずと。退ぞきて凡化し、昔日紅顏雄志の美少年、俄然として、枯稿半死の老人となる。

改革者が喪心失望は尙ほ恕すべし。何となれば、彼輩只だ其力の及ばざるとを知ると云へども、社會の到底善德に向つて自から動くべきとを信ずれば也。故に自力の能く之を造ると能わざるを知ると共に、時勢の自づからにして之を來らすべきとを信じ、前途の方向に對して、未だ必らずしも、疑を懷くにあらざる也。

左れど、喪心失望の改革者中、迷悟して一轉、暗々たる懷疑

者とあり、疑がひて問へらく、抑も文明とは何事の謂ひぞ、人事の便利なるものにあらずや、抑そも善とは何事の謂ひぞ、利益の多々なるものにあらずや、抑そも人世とは何如あるものぞ、朝たに生るゝものあり、夕べに死するものあり、死するものは土に化し、生るゝものは同じきヿを繰返し、人間草の如く榮え、而して草の如く枯るゝものにあらずや、眞理とは何如なるものぞ、茫々として天地廣し、何等の理法あるヿを知らず、漠々として四海廣ろし、何等の理法あるヿを知らず、森々として万象多し、何等の理法あるヿを知らず、大賢尙ほ愚なるが如く、學者尙ほ學びざるに均し、眞理とは到底不定不明のものにあらずやと。彼輩則はち、一日の事は一日にて足れりとし、たゞ確實にして爭そふ可らざるは、美味の甘きヿと、絹衣の軟らかなるヿと、高樓の心地よきヿと、黃金の便利なるヿと、肉慾の樂しきヿと、人の上に立つヿの面白きヿとを知れり。故に彼輩は只だ斯の如くせんヿを欲せり、故に如此く生活せり、而して終りの日來り、死して土となる。かく生れ、かく活き、かく死す。彼輩に於ては、既に改革と云へる文字を忘却したり。

たとへば團扇を以て、大風に當らんとするものゝ如し、直ちに失望す。たとへば、木の葉を以て、大波に向はんとするものゝ如し、直ちに失望す。たとへば、風呂敷を以て、世界を包まんとするものゝ如し、直ちに失望す。たとへば、針を以て天を衝き破らんとするものゝ如し、直ちに失望す。多くの改革者は皆な失望して死せり。

改革常に成就せず、而して世は日々に惡化すと云ふ。世事の趣むく所ろ知るべきのみ。あゝ、世は何如なる方向に進まんとする乎、人は何如なる運命に趣むかんとする乎、人世は抑そも何如なるものぞ、義人正者の憤ふりは、何如にして之を洩すべきぞ。

失望困倒するもの數を知らず、世に歎くの聲引も切らず、不平喪心の翁、到る所ろに死しつゝあり。壯年の改革者將に進まんとすれば、翁は冷笑して云はく、世事は意の如くなるものにあらずと。學者は冷評して云はく、社會は隻手にて動くものにあらずと。父母は憂ひて云はく、請ふ幾多の失望者を見よと。佳人は止めて云はく、郞よ、願はくは彼の喪心の人に鑒み玉へと。

左れど、吾黨の改革者は、毫末も失望する所ろあらず、微塵も猶豫する所ろあらず、寸厘も難止する所ろあらず。前途の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

光明は圓大にして炬の如し、事業は日々に成りて吾等を奨勵せり、未だ嘗て失敗せず、故に未嘗て喪心せず、日夜贊美朗吟して進むことを知るのみ、未だ世事人情に對して其惡化せることを認ためず、世は常に進歩しつゝあり、吾等が改革は行ハれつゝあり、途上結果累々たり、前途極めて多望好望あることを確認せり。

大凡そ、改革者にして失望するものは、心に自利の念あくんばあらず、彼れ多少自から餘するの念ひあり、此の念ひ未だ達せずして身先づ倒れんとす、此に於てか望を失ひ心を痛むる也。

改革者は何事を望むや。人心の惡を改ためて、之を善くせんことを欲し、社會の邪を斥けて、正を張らんを欲するにあらずや。而して、人心は到底善に進むこと能ハざる乎、社會は到底正に達すること能ハざる乎と問ハゝ、天道昭々、人情明々、正義の必らず透り、邪惡の必らず亡ぶることを示す。左らば、改革者は何事の爲めに失望する乎。汝ぢ、正義は行はれがたしと云ふ乎、如此き人は談ずるに足らず、汝は既に眞正改革者たるの資格なきもの也。汝果して正義の行はるべきことを信ずる乎、然らは汝は何事の爲めに失望するや。

若し夫れ、三五年の間だに理想を成就し、其成就の爲めに名を得んと欲する底の野心ありとせば、其改革者や遂に失望せざることあらず、何んとなれば野心ある改革者の改革は成功すべきものにあらざれば也。如此き改革の多く失敗するは即はち眞正の改革の行はるゝ所以にして、上帝は、之に嚴罰を下し人の徒らなる誇りを懲らし玉ふ。

眞正の改革者は、空望を懷きて事を未定の界に試むるものにあらず、理想確々、信念堅々、些少の疑ふ所ろなくして、其事の必らずや成就することを認識するもの也。否な、其成就すべきことを認識するのみにあらず、既に成就したることを實見するもの也。上帝を信ず、其則の行はれ居るの國あることを見たり、世は遂に悉々く此の天國となることを信ずる也。基督を信ず、人の情の必らず高潔に向ひ、遂に完人物となることを信ず、基督は已に完人物となれり、人は勉めて遂に此に達し得べきことを信ず。此を以て吾黨の望みは空望にあらず、既に實在者を見たるなり、吾黨の信仰は浮たるものにあらず、信ぜざらんとするも得ざる也。故に吾黨の改革は、山仕事にあらず、

四

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

必成必達の事業を行ひつゝあるもの也、而して其事業は一日一日に成れり。

基督の十字架上に死するや、徒弟皆な亂散し、天下億兆一人の服するものあらざりき。而して彼は感謝して云へり、吾は世に勝てり、吾が事業成れりと。

夫れ、正を守りて身を終る迄で道を行ふとを得たる人あらば、其人や既に改革を成就したる也、故に之を謝せざる可らず。堂々たる義士正しきとの爲めに身命を擲ちて了することを得たり、天下之より大ひなる進歩、之より確かなる改革あらんや。故に之を感謝せざる可らず。此如き改革者の心には失望あるとなし。失望の時は則はち自利心の萠せし時にして、改革事業の正に敗れたる時なり。如此き人の失敗するは則はち眞正改革の行はるべき道を淸掃打水するもの也。

天は幾多の僞はれる改革者を、其の失望喪心によりて倒殺す。たゞ終りに至る迄で正義を守りたるものゝ手に、月桂樹の冠を與ふ。此の人の手にあらずば、神聖なる改革事業を托するとを得ざるがゆゑ也。

同胞聞くべし、吾黨の戰は空を打つが如きものにあらず、日に日に成功しつゝあり、既にカナンを望見し、日夜讃美の聲たゆる時なし。宗教家何をか信仰と云ふ。此般の活ける信仰あるによりて初めて信仰の味ひを知る。天地の幾變遷、惣じて吾黨に好からざるなし。既に上帝に一和し、基督に伴なふ、天下何の處にか失敗あらん。之ありと疑ふの時は即はち失望の日なり、失望するものは自利の人なり、吾黨何を以て失望するとを得ん、失望せんとするも尙ほ喜びと感謝とに堪へざる也。

隨感

全能者の審判（下）

方寸子

爾省みて疚しからずんば、何を以てか恐るゝに足らん。天下擧つて爾を責むるあるも、爾は斷々乎として良心に從ふべし。されど若し省みて疚しからんか、假令天下擧つて爾を賞むるあるも、爾慄焉として自らを責むべき也。王陽明曰く、山中の賊は滅ぼし易く、心中の賊は滅ぼし難しと。爾今省みてこの賊を心中に見出さゞるか。見出して爾心中の呻吟を聞かざ

る乎、噫われ困究める人なる哉、この死の體よりわれを救はん者は誰ぞや。されどガマリエル爾を救ふに足らず、グリーキ哲學もパリサイの宗律も爾を救ふに足らず、區々たる爾の心術また爾を救ふに足らず。嗚呼爾何處にゆきて救はれんとはする。爾何處に隱れて全能者の審判を逃れんとはする。苦悶、痛責、戰慄、看よパウロ悚然として悟了したり、われを救はん者はクリストなりと。觀ずれば億万の蒼生皆これパウロが痛責苦悶戰慄を擔ふものにあらずや、然らば爾またパウロの喝破せる不思議の悟道に來れ。惟ふに紛々擾々の俗界裏、蠢如として生を送れば、何の恐れあることなけん。されどこれ疚しからずして恐れざるにあらず、自己の實相を省みずして恐れざるのみ。吾れらは日々幾度びかわれ／＼と云ふ、然して眞にわれ自らを知る者何處にか在る。あゝ天下恐れざるの人より憐れなるはあらず、恐れざるは未だ自己を知らざるの證也。

ユダヤの王ダビデ罪あり。彼王宮に住ふて安ずる能はず、彼山水に嘯ふきて安ずる能はず、彼寢室に入りて安ずる能はず、彼れ笏もて冠りもて無上の權威もて身を甲へど、耿々たる巨心かれを覗けば、彼身を震はして戰慄けり。曰く、われ何處にゆきてなんぢの聖靈を離れんや、われ何處に往きてなんぢの前をのがれんや、われ天に昇るともなんぢかしこに在し、われわが榻を陰府に設くるとも、視よなんぢ彼處にいますと。彼れ自失して俯伏せり、彼俯伏して大御手に懷かれき。斯くて彼れヱホバを仰て讚美すらく、神よなんぢのもろ／＼の思念はわれに寶きこと如何ばかりぞや、そのみおもひの總計は如何に多きかなと。アゝ妙えなる哉、パウロが仆れしダマスコの途上、ダビデが自失せるユダヤの宮中、皆これ全能者の懷ろにてあらんとは。天網恢々疎にして漏さず、全能者知らざるとなし、全能者在まさゞる處なし。全能者、全能者、不義なる者には戰慄のヱホバたり、義なる者には慈愛限りなきのクリストたる也。爾若し疑ふらくば耳を良心の皷動に傾けよ、爾尙ほ疑ふらくば眼を壯嚴の天地に仰げ。聲なき者あり、常に天地に響く、曰く。それわが來るは義人を招く爲にあらず罪ある者を招きて悔改めさせん爲也と。爾今此聲を聞かざる乎、耳ありて聽ゆる者は聽く可し。嗚呼、爾愆の身もて義なる大天地に流涙ふ、爾戰慄くか。爾罪の身もて全能

者の台前に佇立す、爾自失する乎。されど爾恐るゝ勿れ唯信ぜよ。爾恐れ戰慄きて全能者の前に涙もて來る時、看よ昭々たる希望の新天地爾の前に開かれ、生命のパラダイス爾を永久住はせんとす。

あゝ歎しきかな　めしひなりせば　おのれを知らず
かみをもしらず　慾のなみまに　たわむれあそび
たゞよふまゝに　日をくらしたり。
われのこゝろは　世にくだりにし　かみなる耶蘇の
血しほをすてゝ　あくたどみなし　おきてをおかし
かみをおそるゝ　こともなかりき。
この世のために　身をほだされて　己がまごゝろの
こゑをもおさへ　いとおそろしく　けはしきみちを
わらひのうちに　あゆみきたれり。
いまは全能なる　神ちかづきて　われのこゝろに
めぐみをあたへ　すぎこしみちを　かへりみおそれ
きよきのぞみを　おこさせたまふ。

With the righteous it should be matter of rejoicing that the judgment is to be eternal. They can desire no change of the sentence which will assign them to heaven. The righteous are the only ones who have not reason to dread a just eternal sentence; and they will rejoice when the time shall come which will fix their doom for ever.

Barnes.

兒籃

小公子。

若松しづ子

第七回（丙）

此時の來客といふのは黒羅紗の服を着た老成らしい紳士で、とりも直さず、此邊りを牧する宣教師でしたが、坐敷へ通つていきなり眼に這入つた有樣に驚いたのが、餘り甚だしかつたので、思はず二足、三足後ろへ退つて、すでのとに、案内に來たダマスに突當る處でした。一躰、モウドント教師は、其職務上の必要の事情でドリンコート城へ推參する時ほど、不愉快に感じることはありませんのでした。

城主は其都度、權柄に仕かせて、存分牧師を不愉快にさせてお歸へしになり升た。此城主は概して教會とか、慈善とかいふとは大のお嫌ひで、小作人どもが貧窮に陥るとか、病痾に罹るとかして、救つて遣らねばならぬといふ時には、此小民どもが好んで、態々こふいふ境界に陥りでもしたかの樣に恐ろしいお憤りでした、酒風症のお痛が烈しい時でもあれば、聞苦しい貧困話しなどは耳障りで、煩はしいとて、遠慮もな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

く、其のまゝお突き戻しになり升たが、お煩がさ程でなく、お心が幾らか和らいでゐる時分ならば、聞くに堪へられぬほど心のまゝに教師をおいじめなさり、小作人一同の怠惰、柔弱なことをお詰りなさつた上句に、幾分か金圓をお惠みになり升た。併し御機嫌の好い惡るいに係はらず、意地のわるい、刺衝的のことを仰つて困しめなさらぬことはなく、流石のモドント教師も、折ふしは、宗教の則に違はずして差支のないことならば、何か重い物でも投げつけ度と思ふ位でした。モドント教師がドリンコート城の領地を牧し始めてより今日に至るまで多年の間、城主が故意に人に親切をなされたとか、何事が出來しやうと自分を置て、他を顧みるといふ樣な御處行が只の一度も有つたのを思ひ出されぬ位でした。今日推參したといふのは別して困難な一條を陳述して、救濟を請ふ爲でしたが、二ツ程理由が有つて、今日の訪問を格別嫌におもひ升た。第一、御前には數日前より持病に惱まれて、寄りつけぬ樣な御不機嫌だとて城下で評判する程でした。これをば城の若いお女中の中で、城下に小店を出してゐる姉が有て、針、糸、駄菓子を商ふのに世間の噂話しを景物に添へるので、結構活計が立つといふ處へ持つて行つて、御樣子を傳へたからのことでした。お城の内幕や、百姓やの内情や、城下で何處に何がある、誰が何をしたの噂を此おかみさんが知らぬ程の事ならば、別段話しにならぬのだと人に思はれる位、世間が明るいのでした。そしてお城のことは尚さら、自分の妹が奥づとめの女中で、それが又給事のダマスには別して懇意でしたから、何もかも承知して居つたのでした、帳場の向ふに坐つて居て、此おかみさんの云ひ升に

ダッテ、マアお聞なさいよ、ダマスどんがヂェーン（妹の名）にぢかにそういひましたと、この頃御前の癇癪とどなり方は恐れるつて、そうしてツイ二日前のことですとどふでせう、マア、燒パンを載せて有つた皿を、突然、ダマスどんにぶつゝけたんですとさ、デスケドネ、朋輩は好し、他のことつて塡合せがついてるから好い樣なもんの、さもなければ直とお暇をとるんだつていつたそうですよ。

教師の耳へもこの話が這入つたといふのは、どこへ行つても侯爵さま斗りは噂の種で、茶呑話しにはキット噂が出ないことはなかつたからでした。第二の理由といふのは近頃新たに起

つたヿで、未だに巷の風評が八釜しいといふ丈に一層難澁な樣でした。先づ世間にかくれもないといふヿは、末息どのが米國婦人と結婚された時の老侯の憤りと、カプテンを逆待されたヿ、續て、御一族の中で、たつた一人名望の有つたといふ立派で、威勢の好かつた若人が、金もなく、勘當を受けたまゝで、他鄕の鬼となつて仕まつたヿで、それから其妻で有つたといふ罪もない若い婦人をば、可愛そうに老侯のお憎くみなさるヿは一通りでなく、引いて出來た子供までが憎く、對面は決して許されぬ積の所が、長男、次男が亡くなつて、儲嗣になる可者を一人も殘さなかつたヿも、孫息子をいよ〳〵迎へるヿになつて情愛があるでも無ければ樂んで待たるゝ譯でもなく、米國生れで有つて見れば、定めし下賤で、不作法で、出過ぎもので、大家の名折れになるに相違ないと心に諚めて居られたヿは誰一人知らぬものも有ませんかつた。自慢と憤怒で胸を燃した老貴人は、心の情は一切人に漏れぬヿと思はれて、自分の感じたヿや、懸念したヿを敢て推測した人があろうとか、況して噂にかける樣なものがあるなどゝは少しも思ひよられぬのでした。然るに耳や眼の俊い婢僕どもは御氣色を讀み、御不機嫌、御鬱憂の原因を察し升て、其解釋を下へ下つては相傳へ、相辨ずるもので、下々の奴原は充分遠ざけて、内情を蔽い盡したと安堵して居られる時分に、ダマスはヂエーンやコックや、パン燒や、給事中間にこの通り自分の說を述べて居り升た、

イヤ、おや玉は今日は、余計八釜しい樣だぜ、こんだ來るつていふ孫どのゝヿ考げへてよ、ナニあんまり外聞の好い方じやあるめいつて心配してるのさ、ダガ、あたりめへだ、仕方があるもんか、矢つぱり、自分がわりいんだもの、アメリカなんて、下司斗り生れる國で、不自由に育つた者がナニ好いものになろう、ナア？

そこで、モドント教師が並木の間を歩ゆみながら、考へられると、此いかゝな孫どのは丁度其前夜、來着になつた都合でした、して見ると、十が九まで、老侯の氣遣ひ通りであつたろうと推量して、さて譯もしらぬ小息子が老侯を失望させたとすれば、十が十までも今ごろは煮へかへるほど猛り立つて居られて、運わるく、一番に出逢つた人が憤りの先に當るので其人は多分自分であらうと思ひ升た、

此通り故、ダマ——スが書齋の戸を開けるや否、嬉しそうな子供の笑ひ聲が響渡るのを聞いて驚ろかれたとでした。イキセキした可愛い〳〵、さえた聲で、

ソラ、二ッ外れ升たよ！ネイ二ッ外れでせう！

と叫んで居升た。

見ればそこに侯爵さまの椅子もあり足台も有つて痛處のあるおみ足はチアンとそこに載つて居り升た。其外お側に少さな卓が置て有つて、其上に遊道具がのせて有て、ズツトお側へすり寄つて、現に侯爵の腕と健全な方のお膝に憑れて居るのは何か一心になつた處爲か、眼は踊り、顔がポツト赤くなつた小息子でした。此見知らぬ小息子が、ソラ二ッ外れたでせう！こんどはあなたの方が運がわるかつたんですよ」といつて、フト二人が同時に向ふを見ると、誰か這入つて來て居升た。侯爵さまは例の癖で、眉を顰めながら、あたりを見廻しましたが、這入つて來た者が誰と分つた時は武しひお顔が倘武しくはならず、却つて少し和らいだのを見て、モドント氏の不審はます〳〵晴ませんかつた。實に侯爵さまは此時計り、御自分の平常人に對して不愛相なことを、お心一ッでどの位人を困しめられたといふことをお忘れなさつた樣でした。此時お聲こそ變られ、多少打とけたかの樣に握手の手を伸べて、

イヤ、モドントか、お早う、わしもこの通りチト新らしい職掌を見付たのだ。

といひながら左りの手をセドリツクの肩に載せ、少しく前へ進ませて、

アヽ、時にこれが今度のフオントルロイだ、フオントルロイ、領内の牧師を務めるモドント氏だ。

と云われる中に喜悦の情がお目に現われて居り升た、定めし世繼たる可き立派な孫息子を紹介する心の底には充分高慢氣が有つたとでせう、フオントルロイは宣教師の服を着た紳士を見上げて、手を出し、ホツブス氏が新らしい花主と挨拶する口誼を一二度聞たとがあるのを思出し、宣教師には別して慇懃にせねば濟まぬものと覺悟して、

あなた、始めてお目に掛り升、何分よろしく

といひ升と、モドント氏は我知らず、ホヽ笑みつゝ、セドリツクの顔を眺めて、手を握つたまゝ離し得ずに居り升た。モドント氏は見ると直ぐ、セドリツクに愛情が起り升た。一躰、

誰でもセドリックを愛したといふのは、其美麗なのと、風采とに最も感じたのではなく、此子息子の心の中に湧き出る泉の樣な淸素優愛があふれて妙に成人びたことをいふ時でもそれが何となく、心よく、信實らしく聞える故でした。敎師がセドリックを眺めて居る内は侯爵のことはさつぱり忘れて仕舞い升たが、實に世の中に深切な心ほど强いものはありません、そうして其深切のあつたのは誠に小さな子供の心でしたが。此暗い樣な鬱陶敷樣な廣濶の空氣を拂つて、明るく爽快にする樣でした。敎師はフォントルロイに向つて

手前こそフォントルロイ殿の眼通りをいたして、誠に悅ばしう存じます、大層長い旅をかけての御來着で御座り升たが、一同御安着を承つて悅ぶことでご座りませう。

エー、どふも中々長いでしたよ、だけど、かあさんが一處でしたからチ、僕、淋しくなかつたんです、誰だつて自分のかあさんと一處あらば、淋しくはないですはチ、そうしてどうも船が奇麗でしたこと。

侯爵は

モドントマアかけるが好い。

モドント氏は腰かけて、フォントルロイ殿を見、亦侯爵を見て特に言葉に力を入れ、

御前、誠におめで度う存じ升。

といひ升たが、侯爵は心の情を人に見られるを厭ふものゝ樣に態と言葉を粗暴にして、

イヤ、おやぢに似て居るは、併し行狀は似て呉れねば好いがと思ふのだ、ソレハさて置て今朝は何用だ。誰が困つて居るといふ譯だ、

雜録

杵屋六女

ひさご

學問といへば書よむ事とのみ思ひ、音樂といへば遊藝てう事とおもひたるこそ心得ぬ、今文物開け行大御代とて其學校まうけられたれど、これはた泰西にまねびつるなれば、そをたふとくことをいやしく思ふは誰も、異ならざるべし、糸竹の音を淫聲といひ蔑しめど糸竹にこそ工多く人を動す力すぐれたれ中にも三味線はさゝやかにて十餘りの音律よくとゝのひ調子

高く人を感動さする力多し、けふ迄用ゐし人あしかりしをもてあしきかたに導びくものとのみおもへるは愚とも愚なる考なるべし、さる工み多かる物なれば入立かたきも他に勝り、いまた片言なるほどより右のあしに胴を支へ肩に掛けて學ぶよりかん所またくおぼゆるまでにはあまたのとし月を要するなり、おもへばおのれも師にこの勞を八年計りとられしなり、我師は勸進帳其他の名あるものつくられて名人の聞え高き杵屋六翁の娘にて六子といはれし人なれば伎倆はいふも更也心ざま高尙にしてたはけき事弟子に敎へ、又おのれ自づからさる振舞して役者の品さだめに日を送り、髮かたちに心を盡すむきの人々とは霄壤のわかちありき、故に音樂の師の藝妓等と同じく見なさるゝを憂ひて其の風矯なんと心をつくされ養女の花子といはるゝと心と一つに文句の淫猥なるを省き、てにをはなど正されしもありき、我家には一六にこらるゝさだめなりしかど障りありてこられざりし時はその月謝の幾分かを返し給ひしあどもたぐひあき心がけと人々いひあへりき、又花會などと稱ふるは弗に催し玉ふ事なかりき、おのれ多病にて根氣うすく師の懇篤にをしへらるゝ事かなしくつくり病して臥し居り又は逃げ走りて少しも稽古に心用ゐざりしかど精神のうへに學びし事はなか〳〵に多かりき、亡兄もこれに服し給ひておのれにもまさりて馴れむつび給ひ、師よ志得ばこのみ給ふ事せんといひ給へば、若きより兩親の間親しからざりしに心づかひしてわづかの間の夫にもおくれ、一人して世をおくるほどなれば、身にあへる責任多くおぼえて未だ樂しみしたしともおもはねど若き時或旗本に誘はれ兩國橋の下に按摩とられし愉快は忘れがたしと常のたまひき、兄外國に志中にして死せし後は己れとこの契はたさんと思ひ、此夏はかならずとたのめしにさる十二日の朝急に腸チブスにてみまかられしよしいひきたりぬ、そゞろあるきの夕つかたなど窓の外より師よお顏見にまゐりぬといへば、簾かゝげてかゝる顏にてよくばよくみ給へ、其かへには一さらひて行たまへといはる、否お顏のみゝば事たりぬとはしりかへりし事しば〳〵ありしが此頃何なく心いそがしくてしばし師の顏もみざりしなり、此報知におどろきかけ行てみればかの簾には忌中の文字はりつけていつも聞ゆる三味線の音たへて人聲しめやかなり、格子戸ひそかに明て入れば線香の香りもの

かなしく、細々と煙り立のぼりてゐまるゝごとく師の眠ぶられし姿橫たはりぬ、かの花子といはれしも四年前に見まかられしかばたゞ孫娘の七ッ計なるが側にいさゝか感染しつる樣子ありとて打伏しゝと幼さなき弟子等の枕上に居より目をすりあかめてかはる／＼線香立かへ或はそと顏のぞきていぶかしげにうちかたぶきて死せるものともおもはぬさま目もあてられず、おのれもしかおもはれねば側に居より合掌されたる手を打そへてみれば胴のあたる所梅干十計りつけしやうにはれたるがかたく成しにもその技倆あきらかなり、死別のかなしみにそひてこの藝もさへ埋めん事いとをしくて胸の中かきむしらるゝやうにおぼえき、おのれ旅にありてけふ舟にのり遊ひしに、いさゝか心地あしかりしかば親しき友按摩せんとていはれし時つと師のおもかげ目にそひてかの契りはたさゝりしことを思ひ出でき、

　　さして行棹のしつくと人やみ舞

　　　過にし事をおもふ淚を

師の葬式は十三日なりしが愛らしき一人の弟子わが側によりて師をこれより燒くとか聞しはまことかとひそめきとひければ、是より巣鴨とやらにもて行て燒き奉るなり故にこのまゝにしてこれより皆かへらばやとこたへけるにわが手をしかと握りハラ／＼と淚を流し、などさる事をさせ奉るあらん、妾はいかにしてもこゝにおきてかへらん心あし、とく燒き奉まつらぬやうして爲へ、とておのれの手を引てゆるさず、ほと／＼困じたれど漸やくいひなぐさめてかへしたりき、まことに師は茶毘一扁の煙りと消てのこれるは其名聲のみなりこれをしもかゝる性質の人なりしかば、しらざる人多きはおのれの心にいとも／＼をしき限りなり、二葉にして一人のこされし栴檀祖母の技倆心ざま、母親の美貌才智、などのかたみにつちかはれ大木ならん時こそはわか師の御名をもあふぐ人多かるべし此のぞみをかくるを少しの心やりにわがうれいをかいつけてわれとわか今の心をなくさむるにな舞。

　　月はあれど留守のやうなり須磨の夏

　山路來て何やらゆかしすみれ草

偶成

在金城　雲峯生

日月匆々夏去つて復夏來る、秋春實に瞬秒の如し、憶ふ嘗て暑を相州に避け、海に浴し、山に遊び、友と交つては快談放語し、獨り波濤を叱して高吟せし事を、今や玆に夏を消す、追懷の情、想舊の心豈多少なからんや、今日偶日曜日に會す、樹下に單歩して讃美を放唱す、五十五番は即ち我好むの調、昨夏「海邊の夕」と題して一曲を作りき、今亦調を同ふし、感を偶してものす。七月十九日、青樹鬱茂、清風徹涼の境にて記す。

一
ながるゝ水には　花もさそはれ
青葉はしげりて　夏はかへりぬ
すぎにし月日の　忍ばるゝかな

二
生けるはうせゆき　身はさだめなし
ひとのこゝろこそ　飛鳥川なれ
はかなきこの世　われはたのまじ

三
すぎにしひと年　なしつるわざも
思ひしことども　泡となりけり
世の事わざぞ　むなしかりける

四
うき世のなみ間に　ひとぞなやめる
梶をばたへたる　小舟のごとく
愛の神ならで　たれか救はん

五
アバ父とよぶも　汝が子にあらず
世は日々に月に　濁るぞかなしき
みくにをまもれ　あゝ我神よ

六
我はうな原の　たゞひとしづく
されどもなやめる　人と友ならん
われはみ神に　忠實にあらまし

七
みくにをばすくひ　つみをばゆるし
我ねぎごとをば　きゝたまふ神
ちよもやちよも　ほめたゝへあん。

綴譯新假名つゞり

杉森此馬

英米の人の名、所ろの名、又は文字の綴りの音などを譯するに當り、常に心地あしく感ずるは、假名の字の足らざることなり。中にも、D. T. V. Th. などの類の音は、デーとも、ヂーとも、ヺーとも、稱えがたく、何如にも心苦し。よりて、新たに假名を設ることとし、半濁音、舌頭音などの符を

從來の字に添えて、此欠典を補なはば何如に。そは、濁音の符、つねは二つあるを、一つにして半濁音の心に用ひ、又た清音に○を附して、舌頭音を多くするとあり。例へば下に示すが如し。

Da Di Du De Do. は ダ、チ、ッ、デ ド

Ta Ti Tu Te To. は タ チ゚ ツ゚ テ ト

Va Vi Vu Ve Vo. は ヴァ ヴィ ヴ ヴェ ヴォ

Tha Thi Thu The Tho. は サ、シ、ス、セ、ソ

右考へしまゝを記し、世の同好者に質す。かゝるとは已ひとり用ひしとて効あるべくもあらねば、願くは、世の人の同意を得て、相約し廣く之を流行らせんとて、則ち公衆に問ふ。（以上、杉森氏の意見、社員筆記）

佛國の小說

近頃ろ好事の人ありて、佛國著名の小說家に問を寄せ、諸君が物し玉ふ小說の目的は、理想を畫かんとするにありや、將た實際を寫さんとするにありや、と質したるに、諸大家の答論、曖昧にして、定かならず、必竟「余は斯くして著作す」と云ふ事情を、御高慢まじりに伺がいたるに過ず、何の確答もあらざりき。

質せし人は、方向を變へ、此度は、佛國有名の小說讀者に問を寄せたり。此等の讀者は、髮を梳らすとき、又は夜眠に就かんとするとき、只だ心ヤリに慰さみがてら弄讀するが如き人にはあらず、眞とに、小說を讀むとを以て其正直勤勉なる日々の業務となす所ろの婦人是れなり。かゝる婦人、パリの都に十二人ありと云へり。

其婦人方の答へを一括すれば、かく言へり、稗史小說は實際世界の事情に似寄りたる事柄を書くべきとは言ふ迄もなし、左れど、此等實際の事情を、美術的に巧みに調合し、香ひを掛け、胡椒を振り、世上實在の人物の如くなるうちに、亦た一種の妙味を有し居る所ろの人物たらしめずんばある可らずとなり。

日本婦人を懷ふ

濠洲メルボーンに在る日本人某（一個の大和民族人と署し送られたり）より、彼のアッケルマン孃が、東洋諸國の婦人を

懷ふ、特に日本婦人を懷ふとの演說筆記を寄送せり。中に云く、

日本に於ては、婦人女子非常の進步を爲せり、彼等西國の文物を採用し、又た昔日の束縛より脫したり、其人となりは皆な溫和にして且つ甚はだ鄭重なり、才智すぐれ、感化を受くることの容易なるは、支那人の比にあらず。女子敎育の爲めの會、又衣服改良の爲の會、大いなる婦人禁酒會などあり。又た、矯風雜誌に女記者あり、日々の新聞紙の一つにも女記者あり、女學校多く、槪して皆な敎育と、眞理と、光とを求むること切なり。日本人特殊の國風は、其の非常に禮儀あつきことにあり、故に稱して東洋の佛蘭人の如しと云ふものあるも、實に眞なり。

○三人相語り、其秘密を保たんには、二人死するにあり。

○樂しみを人に與ふるものは、喜びを受くることを得。

○貧しき人は胃に食物を得ん爲に働らかずんばある可らず、富める人は食物の爲めに胃を得んとて働らかずんばある可らず。

○愚人あるの家族は必らずや舊家なり。

○汝ぢ人が汝の上に望みを失へりと云ふを怒ること勿れ、汝ぢは汝自身よく汝の上に望を置くに堪ゆる乎。

○富とは持てる物の謂ひにあらず、持て樂しむの心にあり。

○全世界にて尤とも高尙なる問題は是也、云く、如何にして善を爲し得べき乎と。

批評

非戀愛を非とす

撫象子

函根の夏期學校にて烈しき論評を耳にしたり、云く、彼は不節操なり、彼は基督敎に關係なきことを世に吹聽せんとて、態と斯る壯語を吐くなり、痛擊すべし、退治すべしと。溫厚長者の爲に異樣に聞えたる評論は、國民之友第百二十五號を見たる人々の憤ふりて語り合ふの聲ありける。

何事ならんと注意して之を讀めば、「非戀愛」と題する一篇の社說の、ちと亂調子なるに據れるが如し。「人は二人の主に事ふる能わず、戀愛の情を逐げんと欲せば功名の志を擲たざる可らず、功名の志を達せんと欲せば戀愛の情を擲たざる可らず」と云へる冒頭すでに誤まれり。人は戀愛をも亦た功名をも主とすべきものにあらず、人の主とすべきはたゞ大道なるのみ、而して大道に適ふときは、功名も戀愛も敢て矛盾するものにあらず。

徒らに少年を激揚せんと欲する族は知らず、彼の藤田東湖をすら非難したる橫井先生を追慕する民友記者たらんもの、只

だ少年の氣に入らんとて、東洋豪傑流の筆法を用ゆべきにあらず。

况んや、其の婦人論に於て、男女交際論に於て、此上もなく戀愛の德と、交際に於ける女子の勢力とを吹立てたるの論者に於てをや。記者その前日の筆に對し、反省して可なり。

但し、余は、記者が時事に激して此の痛語を發せしとを信ぜんとを欲す。蓋し若し戀愛の短所を專穿せば、或は之より尙甚しきものあらんとす、然れども此は戀愛そのものゝ罪にあらず。戀愛は神聖なるもの也。

日曜の會堂に袂を聯ねて男女同席すると、基督敎主義學校に靑年男女の交際を坐視するとの惡弊を恐ろしきとのように論じたり。記者もし些少にても此類の心配あらば、何故に明治二十二年の頃ろに之を痛論せざりし乎。當日の民友記者は、時事翁と共に男女交際論の大先達なりき。而して如今敎會にても、學校にても、男女交際と云ふとを殆んと馬鹿らしきほどに用心し心配し恐ろしがる所ろの現在に於て、記者は事新らしげに斯樣の論を爲せり。斯論果して何程の効驗ある。

男女交際に浮立つ頃ほひ、女學雜誌記者は、男女交際の眞効德を叙すると共に、其大危險を指摘し、格外なる保守的の意見を主張したり。此を以て、今日「國民之友」を編輯する(社說の筆者にあらず)一才子、曩の日「情」記者(余は此人を愛重す)は、女學記者を以て臆病なりとしたり。

左れど彼の日には彼にて宜し、今日は寧ろ大ひに男女交際を奬勵せざる可らず。女學雜誌社員の議決は此如しと聞けり。而して民友記者の此論にあふ、所恨少なからじと察す。

世人は民友記者を以て基督敎會の人と爲さず、記者は素より之を辨ずるの必要を有せず。左れど、記者は同志社學院の主なる贊成家と聞けり、若し基督敎主義の學校及敎會に意見を寄せんとせば、其道なきにあらじ。記者はジョン、ブライトを慕ひ、生平改革者を以て任ぜらるゝよし、改革者の說論は俗流の傾向と併行するものにはあらじ。

余は民友記者を信ぜんとを欲す、故に惑ふて解しがたきものあり、若し果して今日斯の痛論を爲さゞる可らざるの必要事實ありとせば、之を示せ、余も亦た堂々論難して、記者の後を追はん。

人の最も元氣を沮喪するは奴隷と爲るより甚しきは無く、人の最も苦痛を感ずるは意思の自由を失ふより甚しきは無し(民友氏「新聞記者」の一節)

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

千代見草　　文友社發行

葦分船　　蘆心社發行

前なるは、氣の知れぬ麻布より出で、後なるは、よしあしの難波江の邊りに育つ。共に、風流才子と稱する人々の手に成り、一種の興味ありて團珍も及ばず。

進步の燈

第一光として世に照れるは、樣々の新發明を主とし、小說を客として、讀む人に、樂しみ乍ら、世界の進步を味わひ知らしめんとを旨とす。

壬申の亂　　撫象子

「史海」の第三卷に、田口君が「壬申之亂」一篇あり、天智帝崩後、大弟、大友、兩日嗣の分爭を叙し、遙かに、后日、光仁と弓削道鏡との確執の起る由緣を尋ぬ。此篇中、人麿の感慨と、額田王の節操とに關はりては、意表の觀察あり、讀者を驚かすに足る。身を政治上より排斥せられたるものは多くは心を文學に寄するもの也と斷定せる一節、落滴の淚を催ふさしむ。懷風藻の詩は、特に能く兩日嗣の性格の違ふ所ろを示し、兼て皇太弟非凡の資を明らかにす。筆遂に此に及ばず、皇太弟をして凡化せしむ。遺憾の一なり。

小說

腹中の蛇（一）　　湘川漁夫譯

蛇憑が來たり、腹の中に蛇ある人が來たりト、市街の畔に數多の子供の呼び囃すをきゝて、今しも「エリストン邸」の門內に入らんとしたる、彫刻師のヘルキメルは、思はず立ち留り、扨は吾が訪はんとする友人は、五年前迄血氣壯んの身なりしが、神經の狂へるものか、又は實に其恐ろしき不幸に逢へるものか、孰れ病魔に侵され居るならんと、驚く事一方ならず。

腹の中の蛇とよ、必らず彼なるべし、世界の廣きも彼の外には其の如き者を蓄ひ居る者はよもあるまじ、可憐なるロジナよ、倘見限る心なしとは、實に婦人の信は篤きものなり、余は只天の惠により、滿足に余が役を果すことを望むト。

種々思を回らしつゝ、門の外に佇み、其不思議なる人物の歸るを待ち頓て其入り來るを見るに、肉瘦せ色惡しく、目烱り髮長く、其步行も直線ならずして、態〻曲り屈れるは、恰も蛇の紆回るに似て、其有樣何條其心外か心內に、計り知られぬ大變化の起り來り、蛇の入りて、人の形を取り、巧に其性

質を隱し居れど、何人として之を窺へば、全く包み掩ふと能はざるもの〻如し、肌の色も何となく靑色を帶びて氣味惡し、ヘルキメルは曾て嫉妬の神に蛇の如き垂髮を着けて刻みたる、大理石の色合を思ひ出だせり。

不幸なる人は、門の入口に近づきて急に立ち留まり、哀憐を含める彫刻師の顏を確と視詰め、

アラ痛や、喰ひつくは、喰ひつくはト

叫び出だせり。其時吹嘘の音明かに聞こえ來りしが、其狂人の口より出てたるか、又は實に蛇の聲なりしか、ヘルキメルは判斷を下す暇もなく、物の凄さに心の底まで震戰けり。

ジヨージ、ヘルキメル君、余を見知れるかト

蛇憑は問へり。ヘルキメルは、確に彼を覺え知れり、然れど今の變り果てたる姿より、元のロデリツク、エリストンを認むるには、平生多數の顏貌を見分け、彫刻の型を作る、其熟練の力を要せり。人は正しく彼なりき。フローレンスに行きてより、只僅に五年の間に美かりし靑年の斯も見苦き狀に變とは、訝しさに堪ざれど、一度其大變化の實際にありしを知てよりは、一代なりとも、一分なりとも、時の長短は問べき所に非ず、非常の驚駭の間に、最も強く、ヘルキメルの心を苦めしは、婦人の模範とも言べき、從妹なる優きロシナの、天の既に人間界より追放せる者と嫁し斷つ可からざる惡緣の綱に繫れ居る事ありき。

エリストンー、ロデリツクー、君が事は、聞居たれど、斯程迄とは思ざりき、何事の起てか、斯く淺猿き身となりたるト

ヘルキメルは問へば、

オー何事もなし、蛇也、蛇也、世間普通の腹の中の蛇なりト

何心なくロデリツクは答へ、

君の腹は大丈夫なるか、蛇は其中に潛居ぬか、余が信仰と異心と腹の中の魔物とによりて證明す、蛇なき者は不思議なる人なりト

他語を續け目色鋭く視詰たるに、彫刻師は居溜らぬ心地せしが勇氣を出たし、手を延ばして肩を促へ

暫し靜まれエリストン、余は君に逢はんとて、海を渡りて來れるなり。聽き賜へ內談あり、………言傳あり、ロシナより………君の妻よりと

囁き語れば、

アラ痛や喰ひつくは、喰ひつくはト

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

蛇憑は屢々繰り返して叫び出し、苦痛に堪へ兼ね假令魔物の己が命に絡り居るも引斷りて、追出ださんと、自ら胸を裂き破るが如き樣子して身を踠き、遂にヘルキメルの手を振放し、スルスルと紆り歩み古びたる己が住家に隱れ入れり。今の場合にては語り合も詮なき事と、ヘルキメルは敢て追んともせず、再會迄には其病の原因、及其當時の事情を知ん者とて委しく探り、或信ずべき醫師に逢、粗必用の材料を得るに至れり。

四年前の事ありき、エリストンは其妻に別れてより、夏の朝霧の日光の力を吸ひ取るが如く、平生の擧動に鬱屈の狀現れ來り、知遇の人々は、其容躰に不審を抱き、不健康の次第に氣力を奪ふによるか、或は心中の虫の、精神より始めて、遂に其影なる、肉躰の上まで喰ひ出でたるによるか能く知る能はず、皆其原因を彼の自ら破りたる、家族の内に置かんとすれど、滿足を得る程の證據もなく、或は彼の狂氣の方向に進み居るを疑ひ、前の元氣好かりしは、却て其前徵なりと說者あり、或は只一躰の衰弱なりと言ふあり、ロデリック自らの口よりも、別に得る所なく、折々彼が震へて固く胸を押さへ

アヽ痛や、喰ひつくは、喰ひつくはト

いへるを聞のみにて、其とても、聽者によりて意味を異にし、

ロデリックの腹を嚙む者は何なるか、悲なるか病の齒なるか、我は又遊樂に耽るの餘り、殆んど放蕩の眞際に達し、潜かに犯したる罪ありて、悔みの齒にて嚙まるゝものかト

色々なる解釋を下し、皆其中に一理あれど、安樂を好む無頓着なる老紳士の中には、一人ならず、公に確かめて、此大秘事の原因を只消化不良に歸したる者有しは、隱れなき事なりき。

兎角する内ロデリックは己が身の上の、世間の問題となり居るに心付き、其一事のみならず、万事につき風說を憚り、交際を避けて、己が隱家に閉ぢ籠もり、甚く人目を嫌ひ、友人の顏は愚か、遍く世界に照り渡り、天下一般に及ぼす、造物主の博愛を像る、大陽の光に接するをも厭ひ、夕暮も倘明に過、出歩くは、只暗黑の眞夜中のみにて、他に見らるゝ事在とせば、

アヽ痛や、喰ひつく、は喰ひつくはト

胸を押へて市街の中を曲り行き、折々夜廻の燈光に照らし出ださるゝ時のみなりき、彼を嚙みし者はそも何ありしや。

其后エリストンは、市中のあるとあらゆる醫者にかゝり、金力にて呼能ふ者は他より迎へ頻に療養を試み居ると知れしが、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

其内の一人、己が療治の當れるを信じ、手柄を現さんとて、秘術を用ひて有名なる紳士、ロデリック、エリストン氏の、腹中の蛇を逐ひ出だせりと、張札或は引札にて麗々と廣告し、其の奇怪なる秘事は、其れより隱家を出てゝ、忽ち世間一般に傳はり行きしが、出でざるは、心中の蛇にて、其は只氣の迷なるべけれど、尚依然として生ける洞穴の中に蟠り居れるが如し。彼の山師醫者は、麻醉劑にても用ひたると見え、蛇よりも却て人を危め之れがためロデリック、エリストンは、殆んど死に垂んとせしが、漸く感覺を復せし時は、不幸にも事は早く市中に知れわたりて、一時の風評に止らず、其れに引き替へ、腹中の蛇は、活き動きて、益々勢を逞うし、動物の食慾と、惡魔の兇惡とを打ち雜ぜたるが如く、荒れ狂ひて嚙み付けり。

ロデリックは寢牀に打ち臥し、親の時代より養ひ置きたる、年長けたる黒奴を呼び、

シピオト

言ひかけて、胸の上に手を當て

シピオ、人は余が事を何と言ひ居るやト

問へば、召使は猶豫ひて

吾が主君よ、蛇に憑れて苦み賜ひしと申すをきけりト

恐る恐る答へけり、

シテ其外にはト

ロデリックは色を失ひて再び問へば、

外には何も。醫者の藥を用ひてより、蛇の忽ち牀の上に跳り出でしと申す噂の外にはト

シピオは言ひけるに、

否々ト

ロデリックは頭を掉りて、強く胸を押し、

蛇は尚此にありて喰ひつくは、喰ひつくはト

獨自ら呟けり。

事の既に現れ知れてより、憐むべき病者は世を避くるを思ひ止め、却て好んで人々に接するに至りしは、或は絶望の餘り其の心中の洞穴の、假令惡魔の城廓を搆へて、住まひ居るにも拘らず、深からず暗からずして、秘密を隱すに由なきを、悟れるによるか、或は多くは世間を憚らざる其容躰は、全身に徹り亘る、激烈なる苦痛の徵候なるべし。罪にあれ、悲にあれ、尚程輕き常に斷ざる困苦にあれ、果べき生涯に伴ひ繫がる害悪にあ

促がしたり。

れ、精神と肉躰との病を問はず、慢性の病者は、甚く自己の念を長じ、病の苦痛に強く我と我を感じ、自己と言ふ事は、其の重なる思想となり、人に逢ふ毎に先づ必らず其事を語り、爛れたる手足、若しくは心中の腫物を示すことを以て最上の樂となし、罪の愈々不潔なるに隨ひ、愈々自ら禁ずると能はずして、蛇の如き首を、社會の中に突き出だし、世間の人を驚かすを常とすれど、是は又强ちに奇とするに足らず、其罪惡といひ、腫物といふは、即ち人間各自の特性を組み立つる者なればなり、僅以前迄高く構へて、世間に友あるを嫌ひ居りし、ロデリック、エリストンも、今は全く此の卑下なる法則に從ひ、蛇は即ち自己心の標記となり、万事につき都て己れを本とし、日日夜々其の魔心に犧牲を捧げて心の中に養ひ置けり。

時事

○新官制

人才登庸の途開け、局廳分合の上に活敏の度を増せしやうなれど、其他に於て、新官制に大したる利益あるを見ず、特に之が爲め政費を減ずると幾干もなし。蓋し宏大なる改正は、宏大なる變革の后に於てせざれば、成就しがたきもの也。

○新東京府知事

新府知事富田君を歡迎す。君が師父勝伯の祝書に云く、

東京府知事に御拜命の旨先づ御悦申延候、已後益々誠意を以て愛民に被對候樣相祈候乍併世間段々六ケ敷相成御苦勞の事と推察何れとも以拜眉可盡候。

斯て、富田知事は、誠意を以て終始すべきとを公客に白されたり。上に、新内務大臣の説あり、今ま此の令尹を迎ふ。政治界に誠意誠心の聲を聞く彌よ高きは、祝すべきと也。

○小女畧賣

奇怪の風説あり、滑奴支那人、小女を畧奪するものありと。警察の嚴重なる保護を仰ぐ。

○廢娼論

夏季學校に於て、東西南北來の青年に訴ふるものあり、廢娼論大ひに動き、本年末の運動に對する計畫甚はだ熱せり、又た、全國廢娼同盟會の委員は、各地の連合會に通信し、來る十月に年會を開き、十一月の議會に對する運動を議せんとを

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

促がしたり。

○風俗取締

新内務大臣第一の目覺しき施政は、風俗上の取締を嚴重にするとの義是也。吾人が喜こび何ものか及ばん。

○刺客

刺客を愛敬するの醜風今に吹絶えず、蠻野の遺習として恥かしき限りなりき。之が爲め、西野文太郎の墓に線香を燒き、來島恒喜の寫眞を額面に揭ぐるなどの愚人尙多し、愚人の存するは尙忍ぶべし、之が爲めにいよ〳〵同胞を狂愚にするに至つては痛歎幾何ぞ。新内務大臣は、省令第十一號を以て、刑死者の墓標、肖像等に關する取締を布告せり。風俗取締の上に於て大に賀すべき也。

○夫婦敎員

富山縣師範學校には、學校に夫婦共に敎員たるとより紛議を釀生し、數ヶ月來今に斷えずと聞ゆ。各府縣師範學校よりは夫婦敎員は何故に弊害ありや示されたしと照會するものもあるよし。笑ふべき話しにはあらず、歎ずべき出來事と謂ふべし。

○私立校

身、イルビングにあらざるも、豈に官立校の長所を辨知せずと云はんや。然れども、官立校に非ざれば不可なりとし、民の膏血に養なはれつゝ、巧みに策を放ち、彼の自由の子を活育し來る私立校を滅し去らんとするに至りては、何人と雖ども服すると能はず。況んや、本來今の官立校なるものに全く感服せざるものに於てをや。文部省、果して何如なる策を畫する乎、吾人は之を知らず、左れば民間大私立校の人の俄然掛念苦慮するによりて、大躰を察知すべき也。吾人は爲めに政府に弔意を表す、あゝ高等中學は、本年多く滅運に歸せんと。

○學士の譽れ

譽れは、人の優待せざるによりて損する乎、人の優待せざるは譽れなきによる乎。譽れなきは、譽れあらんとする人の怒りに觸るゝに足る乎。世人皆な質問す。

○信任投票

一時の勝を只だ票數によりて決せんとし、各員未だ衷心より大勇斷を發せずば、幾度の信任票を投ずとも何かあらん。

女報

可愛子編

●皇后陛下の御訓諭　我皇后陛下は深く婦人慈善會の擧を嘉せらゝと共に、痛く其後の弊に流れて慈善の實を失ふを歎かせられ、今回來る十一月頃を以て第十一回の慈善會を開かんとて、委員の者が其の準備に取掛れるを聞し召し、侍從して仰せ聞けらるゝ樣、從來婦人慈善會の開會に際し、其陳列する所の諸物品は大半華奢艶麗を主とする所の裝飾品のみにして、實用の品とては殆んど稀なることそいと惜けれ、將來は成るべく實用の品を主と爲せよ、且つ其會場に出でゝ之を販賣する者又會場に臨みて之を購求する者、成るべく華美を捨て、質素を勉むべく努め本會草創の趣旨に戻る樣の振舞あるべからずと、いとも篤き御訓諭を下し給ひしと承はる。

●還御　皇后陛下は六月二十五日より芝離宮に御滯在あらせられしが、七月十七日午後三時三十分仝離宮御出門にて、御機嫌麗はしく還御あらせられたり。

●行啓　皇后陛下には、七月二十四日午後三時御出門、暑中伺として靑山御所へ行啓遊ばされたり。

●有栖川若宮妃殿下　威仁親王殿下妃慰子殿下、幷に栽仁王及實枝子女王兩殿下には避暑の爲め、靜岡縣下輿津驛の淸見寺に向け、去る廿三日出發せられたり、同所御滯在は凡そ七週間の御豫定なりと。

●松方伯夫人富岡の別莊に赴く　松方伯夫人には家族一同と共に、七月十九日午前九時三十五分新橋發の滊車にて、神奈川縣久良岐郡富岡の別莊に赴かれたり。

●高嶋夫人　高嶋陸軍大臣の夫人は、去る二十三日、夫と共に大磯に赴かる。

●日本赤十字社委員部總會　七月十九日赤十字社富山縣委員部に於て社員總會開き、同社幹事子爵松平信正氏事務員岩崎駒太郞氏を伴ひ、總裁殿下の諭示を含み佐野社長の祝詞を帶び出張參會せり、當日來會せしものは二百五十餘名ありて頗る盛なりしといふ。

●築地立教女學校　に於ては六月廿九日卒業式を執行し、卒業者は、全科卒業栗原ゆう、櫻なほ、辻その、伊藤とよ、石黑よし、豫科卒業生山下あか、松崎たけ、瀨川まつ、合して八名なり。

●東京女學舘の卒業證書授與式　女子教育奬勵會の設立に係る東京女學館に於ては今回八名の卒業生を出せり、卒業式當日の來賓には、九條公爵、土方宮内大臣、辻文部次官、岩倉公爵夫人、後藤伯爵夫人を始め、内外の貴女紳士無慮三百餘名にして、流石に廣き式塲も之が爲め狹隘を告ぐるに至れりと。

●華族女學校　にては七月十八日卒業式を執行し、中等科及び小學科の全科卒業生及び各級及第生に同證書を授與せり、來賓には有栖川宮妃殿下、鍋嶋公爵夫人、大山伯爵夫人、曾我子爵夫人、其他百八十餘人、西村校長の演說あり、卒業生加藤木の芽女の謝拜ありたり、卒業生ハ、高等中學第一級卒業、加藤木の芽、辻村幸、高等中學第一級別科卒業久保貞子。

●女子高等師範學校卒業證書授與　同校に於ては七月二十一日、小學師範學科生徒和歌山縣士族白樫よしの一人に卒業證書を授與せり。

●女子高等師範學校暑中休暇　は七月廿日より、附屬幼稚園も共に。

●東京婦人矯風會　にては七月四日、小日向臺町なる淺井會頭の宅にて、今月の議會ありたり、因に云ふ、淺井會長は此程辭せられたりと。

●地方の女子職業學校　宮城縣仙臺市大町に女子職業學校あり、校長を志賀知子とす、教授科目は裁縫、編物、讀方、作文、算術、家事經濟、脩身等とす、洋巾製造の如きは、殊に見事なりといへり、生徒の數目下五十二名、四名の教員之を分擔す。

●保姆傳習生の卒業　芝公園の共立幼稚園に於ては今回幼稚園保姆傳習所生十餘名卒業せり。

●東京婦人矯風會の預け金　七月四日同會の議員會にては、今迄當會事務所建築のため積み立てし三百圓の資本金子の銀行に預けあるを、更らに高利の利子を附くる所あるにより、預け更へを爲さんとの議も出でたれど、人員少數の爲め決議に至らず、尙ほ後日各部の投票を以て議決することゝなりたり。

●故畠山勇子の小傳　を編纂して一小冊子となし廣く江湖に施與せんとす、谷鐵臣、吉田嘿、江馬天江等の諸翁は。

●畠山勇子の遺髮　は此程東京に持ち歸りて葬ることになしたりと、遺骸は其まゝ京都末慶寺にあり。

●勇子地下に哭す　勇子の死を奇貨とし口を慈善に藉て、密に腹を肥さんと企る猾兒あり、自稱有志者是なり顧れば滔々たる濁世、國家を道具に用ひ以て浮雲の榮利を貪るもの比々皆然りとす、噫、と日本新聞は歎息せり。

●東京府下婦人の賃仕事　はランプのほやの破れ、明瓶を買ひ集めて賣るもの(一日の賃錢五錢を出でず)麻布草履(一日所得八錢五厘位)卷煙草(五百五十本卷きて五錢五厘上手なれば一日三千本卷くとを得)女髮結ひ(一日平均十七錢以上の賃錢を得)魚の骨拾ひ(一日二十一錢は六ケし)等なりと、精しくは東京婦人矯風雜誌を見るべし。

●高和民子女師逝く　同女師は茨城縣久慈郡太田町の人にして、順天堂主人佐藤博士の母人なるが、久しく病の床に臥し看護療養怠りなかりしも、藥石其効なく終ひに去ぬる七月十日を以て死去せられたり、女師は夙に淑德貞節の聞へ高く、又常に和歌生花を嗜み、且つ婦道學び得ざるものなき程なりしかば、明治六年中太田女學校を設けらるゝや、加納隆子小澤仲子等の女師と共に專ら教授の任に當り、諄々敎へて倦まざりし、今日に至りてこそ女子教育の道大に開け、教授萬端間然する所なきも、夫の學制頒布草創の時にも拘はらず、當時太田女學校とて廣く世に稱揚せられ、且つ他の摸範なりとまで仰がれて、大に同校の面目を表彰し又女德涵養上に就て其資益を與へし事の許多なりしは、女師與つて又大に力ありし

なり、斯くまで功德ある女師なりしも、惜むべし、六十八を一期として終れるとなり。

●靜岡縣尋常師範學校女子部生徒　蜂屋同校長の郡長に轉任するにつき、其恩に報ひんが爲め花瓶に添ふ紫壇の臺を、贐として贈り、別に外面的の送別宴など開きては送らざりし故、同校長も大に喜ばれたりとぞ。

●感化院起らんとす　今の福井縣警部長片岡直温氏が滋賀縣に在住の際、氏の盡力によりて設置の運となり、篤志者の寄附金も出來たる滋賀感化院は、同氏の轉任と共に立消の姿なりしが、近來當局者に於て奮發し、近日贊成家の相談會を開き。至急其素志を遂せんとなし居るよしなれば不日開院の運に至らん。

●女理髮者の分離　滋賀縣大津町の同業者は、男女同一の組合規約なりしも、女子は男子と其趣を異にし、集會などの際にも不都合なりとて、去日女理髮業總代木村とら小橋うめ兩人より分離の義を同縣に出願せしが、其願意は認可せらるべしといふ。

●慈善會の演說　七月十二日滋賀縣蒲生郡八幡町西御坊に於て、近江婦人慈善會を開き、吉谷覺壽氏の演說ありたり。

●會長の承諾　近江婦人慈善會は此度大越滋賀縣知事夫人花子へ同會長を囑托したるに、直に承諾あり、尙本會の爲めに盡力せん、とのよしを述べられたり。

●孝女　孝女川嶋なつ、今年僅に十一、今年四十六歲なる母あさと共に京都下京區元廿六組早尾町に住めり、兄は人力挽きを營業となし居たるが、身持よろしからざりけん、先つごろ母と妹とを振捨て今は大坂に在りとかや、後には甲斐なき母子のみ、固より貯へのある身ならねば其の日の烟りも立てかねがちにて箸とらさる日多し、母は家の暮し倅の身のうへなど案じ煩らふ餘りに癪ゐ起して病むことの屢々なるを、なつは心をいしくも洗濯炊事まで自からし、母の病るときは夜も寢ずして看護するかひ〴〵しさに、近所のものも痛ましさといぢらしさに袖ぬらさぬはなかりけり、なつの眞心天に達し、醫療の功を奏して、母は病少しく輕快を覺へぬ、快くなるに隨ひて母は何かな相當の手仕事もあらばと思ふ折しも、隣町なる菊屋町の貧窮人伊藤榮吉一家が腸窒扶斯に罹り、誰とて世話するものなく、町内より看病婦を雇ひ入れんとすれども、傳染病の事なれば皆忌み嫌ひて往くものなしと聞き、少しにても手間賃を得て暮しの足しにせんものと、募に應じてなつを留守番に殘き、毎日看病に通ひけるが、不幸にも四五日前より傳染して、再び我が家に打臥し呻吟苦しみ居るにぞ、なつは世に悲しき事に思ひ若もの事があらばいかゞせん、母が斯る病に罹りしも原を糺せば我がうへを樂に養なはんとての事、そのお心根が物體なしと、孱弱身を物ともせず大人も及ばぬ心づくし、藥をはじめ粥は更なり、撫さすり萬端屆かぬ所なき孝行には、獨り近所のもの丶感心するのみならず、區役所の衞生掛、書記及び巡査等も同家に出張し、其の孝養を盡せる樣を見て、坐ろに感涙して物など與へ讃稱へ行くといふ、十一歲頃遊びたき盛りなるに斯く心を小て孝行の外餘念なきは、世にありがたき少女といふべし。

●結婚　七月十六日京都府城東後樂園に於て　同志社教師「ドクトル、チアイ、ヒロソヒイー小野英二郎氏と橫濱ノエリス女學校卒業生稅所ヒサ子孃（上道郡長稅所信篤氏の令孃）と結婚式を行はれし由。

●外人の結婚　六月卅日大坂教會堂に於て同府尋常中學校雇教師米人バセット氏と、梅花女學校音樂教師米人ヴエター孃との結婚式を擧げられぬ。

●神戸保姆傳習所卒業式　七月十日、同地婦人會の設立に係る頌榮幼稚園附屬保姆傳習所第一回卒業式を執行し、卒業生拾名ありたり。

●栃木縣尋常師範學校　に於て、七月十七日、本入學を許可せし女子は八名ありたりと。

●宮城縣尋常師範學校　に於ては、七月十二日、十二名の女生入學を許さる。

●松操女學校卒業式　宮城縣下の同校は七月十二日卒業式を行へり、高等科生八名、尋常科生十八名卒業、同日生徒手製の編物を列して、參會者の縱覽に供せりとぞ。

●看護婦人例會　は宮城縣下本願寺内に開き、繃帶の溫習等をなせり、出席者六十餘名。

●結婚と離婚　宮城縣下の六月中の結婚は四十五、離婚は三十四。

●山陽英和女學校卒業式　七月十八日山陽英和女學校の第一回卒業式を執行せられたり、同校は明治十九年九月頃、同地の有志者數名相謀りて東中山下の一民家に設置せられ、最も小なる女學校にてありしが、五年の星霜を經て基礎愈々堅固になり、今や第一回卒業式を一大學校の講堂に行ふに至りたり、祝すべし。

●三島製絲所の概況　鳥取縣久米郡倉吉町三島製絲所は、昨年六月以後工女五十餘名を聘し居りしが、今般試驗を施行し夫々等級證書を與へ、且つ成績優等の者へは賞與を授與せり、又同製絲所へ雇聘せる工女は、毎月賃金の內一割を貯金して、解雇の際之れを下渡し、若し雇入中行狀正しからざるとあれば、蓄積金を沒收するの規定を設け居れりと。

●防長令女教會　といへるを創立せんとて原山口縣知事、松下山口縣地方裁判長等の妻女が發人となり、頃日頻に計畵中なるが、贊成者は頗る多き由なれば、不日一團體を形造るに至るべし、同會は毎月一回會合して德育智育衞生の三件に以て專門家の講話を聞き、會費として若干を醵金し、雜費を支拂ひたる殘餘は之を貯蓄して慈善の資に充べき都合なりと。

●高知縣尋常師範學校女子部及び尋常中學校女子部本年の卒業生　は磯部鶴、濵田蘭、濵口夏、橋本佐治、岡上國、清岡虎代、濵田富士、岸本富、岡嶋登女起、木戸幸、川田安猪、宮崎榮、美濃部春龜、近森延、三宮万壽、吉本兎喜世、田村駒衛、和田茂喜、桑山爲、來正年來、西村益衛、二十氏なり。尋常中學校女子部卒業生人名及席次は　田所富世、國澤小熊、秋澤駒衛、下村靜猪、由井鹿、樟清喜、依岡愛、井上茂代、橫山濟、南丑尾、島本春氣、小林千衛、植木香小枝、尾崎久、橫田美彌、長崎登喜代、濵田多女、根來桃亥、楠瀨兎女、北川金、生田佐猪、山崎龜世、安岡貞江、岡崎春惠、濵田虎猪、西村登美世、西村貞吉、吉松登茂代、小松親吉、二十九氏なり。師範學校卒業女生の內七名は、既に縣下各學校へ聘せられ、其他も不日夫れ〴〵

●石嶋良三郎氏　曩に無罪となりたる上毛青年の同氏は、撿事の控訴にて東京に送られ、警視廳監獄內にあり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

雇聘せらるゝと云ふ、又中學校卒業生中五六名は勉學の爲め出京し、五六名は尋常師範學校を望み、其他は自宅にて勉學するもあり、種々なりと、本年の卒業生中最も年少かきものは十四年何ヶ月にして、大抵十六七八位ひなり、されど二十二三の者二名ありたり。

●讃州高松の女況　全地は未だ女子教育盛ならずして今日迄は只一つの女學校あるのみなりしが、此度進德會と名づくる婦人會にて更らに一つの女學校を設立せんとの共議中なりと云ふ。

●熊本婦人矯風會の美擧　十年の役に勇將の名を轟ろかしたる別府新助の一人娘は、夫の爲め身を賣られ、艱苦に沈める由、女學雜誌に記載せしことありけるが、熊本婦人矯風會員は、其娘の爲め、特に委員を派出して實情を探らしめ、今回鹿兒島縣出身の士安樂警部長なども幾分の寄附をなし、其他普く寄附金を募集して娘の身受をすると云ふ。

●熊本英和學校新任校長　今年二月熊本英學校及び熊本女學校、熊本教會の委員は、一書を飛ばして滿腔の衷情を在英、藏原惟郭氏に訴ふる處ありしが、氏の義心は大に感動する所あり、今般愈々應諾の旨申越されたれば、兩學校及教會に於ては目下非常の困難を極めたるにも係らず、四百六十五圓九十四錢の捐金を募集し、同氏旅費として遞送する事となれり、されば同氏が歸朝の上、校長及牧師として其任を盡さるゝは今年の仲冬を過ぎざるべしと。

●醜業婦人　七月十五日上海に到着したる英國商船モーレー號に十八人の日本婦女と、六人の男子乘組みありて香港に行く由を言ひ居れり、彼等は同十二日に始めて發見されしものにて着船するや否や、船長より英和兩國の領事に通知せしかば、日本領事は直ちに之を取押え本國へ送還したりと云ふ。

●米國禁酒會吾が國に寄附金を求む　米國禁酒會長フランシス、ウヰラード女史は來る十一日の大會の節愈々辭職を申出でんとの決心より、氏が當任中今日迄の負財を有志の寄附を仰ぎて悉く返償し終へんとして、此度吾が東京婦人矯風會へも應分の寄附を乞はれたれば、同會にては各部の意見をも聞き合せの後何れとも返事することゝなせりと。

●女子商業學校の創設　露國文部省は此程漸々女子商業學校を設立することに決定せり、開校は本年九月の見込にして、授業科目は中等商業學校の授業科目均しき學科を適用する目的なり、即ち其重なる科目は簿記、商業、通信、商法、爲換法、商業地理、理財學等にして、外國語は佛、獨の二國語を必習の科目中に入れ、英語は志望に任せ之を學ばしめ別に授業料を納めしむる筈なり、入學者の採用は中學校其他中學に均しき學校の卒業者に限りて之を許し、修學年限は二ヶ年にして、授業料は一ヶ年百ルーブルづゝを納めしむる見込なりと云ふ。

●リビット夫人　は世界婦人禁酒會の通信書記兼世界遊說員として、明治十八年十一月米國ボストンを發し布哇、日本、支那、印度、新西蘭、濠洲、南亞非利加、歐洲大陸諸國を遊說し、各地に婦人禁酒會を設くると八十六、白十字社の支部を置くと二十三、凡ての公衆を集め禁酒演說を爲すと千六百回にして、夫人の旅行は殆んど十万英里に達し、本年七月十五日米國サラトガに開く米國禁酒大會に臨場する爲め、歸米の途に就きたりと。

次號に前卷の總目錄を附すべし。

女學雜誌社出版書目

鈴木弘恭大人述	つれ〴〵草講義	一冊	價金八錢
鈴木弘恭大人述	文法口授	一冊	同十六錢
鈴木弘恭大人述	百人一首講義	一冊	同三十五錢
船越鼎太郎君著	產婦小兒攝生法	一冊	同十六錢
關輪正路君纂	ひめ鑑	一冊	同四十五錢
中島俊子著	善惡之岐	一冊	同卅五錢
橫山雅男君著	婚姻論	一冊	同十六錢
島田三郎、植木枝盛兩君演說	廢娼演說	一冊	同五錢
嚴本善治述	妓樓全廢	一冊	同五錢
島田三郎、嚴本善治同著	公娼可滅	一冊	同五錢
農學士寺尾熊三著	植物學	一冊	同十二錢
林學生星野愼著	昆虫植物金石採集法	一冊	同十錢
明治女學校教師八木兼辰著	和畫手本	四冊	同一圓
女學雜誌社編輯	演說著作材料	八冊	同四十錢
嚴本善治著	鐙子小傳	一冊	同八錢

下六番町六番地　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

正札付

新形

流行

○はおり紐　品々

○帯留類　品々

○時計紐　品々

○メリヤス　品々

右ノ外組糸一切御好ニ應ジ精製仕

○御進物等ニ美麗ニ調進仕候

組糸老舗

日本橋區よし町

佐竹勝兵衛

○御用ノ節ハ御報知次第參舘仕候

女學生

第十五號には、暑中休暇前の奮發に成りたる八校の女秀才が腕くらべの文を載す**附録**には銅版富士山の圖を入れ、天知子、可愛子が簡潔明快なる紀行を掲ぐ。

毎月一回發兌●一冊郵税共六錢

女學生

悲哀胸を打つ……………………

まどひの縺

偶感數番……………………暗光子

英雄の眞面目(偶感二)…………川合信水

學友よりの手簡……………山月子

部下の夏遊び……………如是

樂情…………………………野雄子

睦びの家

春夜書感………(明治女學校)…鈴木げん子

婦女子の職務……(女子學院)…瀧口みか子

古烈女の傳を讀む……(女子神學校)…森田千子

普通學の必要(下卷)……(頌榮女學校)…德澤くす子

竹に對するの感……(女子神學校)…山田いくこ

春日山に遊ぶ……(越後高田女學校)…赤井さくら子

女子獨立學校閉校式祝歌…(女子獨立學校)…加藤さし子

卒業式の感……………(立教女學校)…伊藤さよ子

水邊納涼…………(東洋英和女學校)…飯塚しづ子

校を閉づる時…………(女子獨立學校)…矢田たき子

附録

富士登山の仙話(富士山の圖入)…………天愛子

女學生仝盟各女學校は左の如し

○明治女學校○女子學院○新榮女學校○女子神學校○共立女學校○フェリス和英女學校○頌榮女學校○跡見女學校○立教女學校○成立舍女子部○女子獨立學校○海岸女學校○長榮女塾○東洋英和女學校○青山英和女學校○金城女學校○高田女學校

竹越與三郎著

新日本史

全二冊
上卷定價
四十錢
郵稅六錢
紙數四百二十頁

此書は新日本の起原、進步、變革の光景を說明する論評史なり、筆は幕府の中年、江戶侍の權勢其の項上に達せる頃より起り、國會開設に至つて結び、事は政論の變遷、政治家の人物、雄藩外國の陰謀、宮嬪、公卿の陰私より經濟、政制、思想、文學、宗敎、物質的の進步に及ぶ、一讀せば高山に上りて新日本の大旋渦を目擊するが如きものあらん、今や政變、外交の部を集めて第一卷として出版す三日にして再板となる

東京々橋區日吉町　民友社

再開業

下谷西黑門町　（女醫）荻野ぎん子

特に女學生諸君の爲に別室を準備し且つ特待治療す。

外神田松永町　渡邊泰

新發明品 **手桶湯わかしの廣告**（專賣特許願中）

一家の經濟は細かき所ろに用心して、些細の事を大切にするにあり、古しへより儉約せずして家の富みたる例し曾て有らず。扨て、此の儉約を爲さんには、家の內の用事を成べく簡畧にして、無用の手を省き、無用の費を惜しむにあり。儉約は、富を生ずるのみならず、勉強を生じ、人々心はげみて皆々面白くあり、一家相樂しみて春風の心地よきが如くなるものなり。一家の經濟に心を着くるは、家を富まし、家を樂しくし、家を樂園の如きホームと爲するものなり。

此主意を以て、吾社はホームを美しくするとに樣々心を碎き多年、文筆敎育の上よりして之を試ろみたれど、亦以て一家內の實際の改良を促がすとの大切なるを感じ、先づ家具を簡便にして、細君の勞を省き、台所元の入用を少くするの法方を工夫せんとす。

扨て第一に工夫したるは、手桶湯わかしなり。此は手桶の中に湯わかしを入れ、僅かの炭火にて二十分間に之を熱湯にわかすの法とす。器具は至つて簡便なるものにて圖に示すが如し。手桶にても、水がめにても、盥にても、風呂にても皆な用ゆべけれど、夏向き行水などに使はんに、手桶に投げ込み置き、二十分にて沸きたるを一杯用ひ、更に第二の手桶に投げ入れて、又の二十分間に更に熱湯を得ば、至極重寶ならんと思ひ付き、假りに「手桶湯わかし」と名づく。

目下專賣特許願中ゆへ、遠からず免許あるべし、左れど時節から一日も早く入用の品と思ひ、八月一日より賣出すべし。代價は銅製にて一個一圓五十錢とす。更らに追々工夫して廉價にて出來上るやうにすべし。

八月一日

東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社家具部

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

同志社女學校生徒募集

來ル九月十四日始業入學志願ノ方ハ同日迄ニ申込アルベシ規則書ハ郵劵二錢ニテ送付ス　京都市今出川　同志社女學校

共立女學校生徒募集

開校以來二十年一日ノ如ク敎務ニ鞅掌セシピヤソン氏今般其任ヲ解キ專ラ福音宣傳ニ從事スルニヨリ多年北米師範學校ニ敎授トシテ經驗ニ富メルブルツクハート氏來着代リテ敎頭ノ任ニ當リ大ニ學則ヲ改正シ新ニ奔ラズ古ニ泥マズ日本女子ニ適切ナル高等普通ノ和漢英諸學及裁縫圖畫音樂凡テ必要ノ學科ヲ敎授ス寄宿通學ヲ論ゼズ入校志願ノ令孃貴婦ハ速ニ申込アレ規則書入用ノ方ハ二錢ノ郵劵ヲ投ゼラレヨ九月十日開校

明治二十四年七月

横濱石川山二百十二番

共立女學校

本校各學科生ニ缺員アリ且今般敎師ヲ增シ校則科目等ヲ改正セリ入學志願ノ方ハ至急申込アレ入學試驗九月三日四日五日

但規則書入用ノ方ハ郵劵二錢御封送アラバ直チニ進呈スベシ

明治二十四年七月

横濱山手百七十八番

フヱリス和英女學校

私立明治女學校生徒募集廣告

小學尋常科卒業の人は無試驗にて最下級即ち豫科第一年級に入ることを得。

豫科を三年とし高等小學科の敎授を悉くす。吉田のぶ子其科長たり、巖本善治氏之を監理す。

豫科了りて後ち本科を三年とす、賢妻良母を養成することを主旨とし、家政女藝及び女學を悉とく敎授す。

◉右九月十日後各級に入學を許す、規則書需用の人は郵劵封入申越あれ。

東京下六番町　明治女學校

文部大臣子爵榎本武揚公題字
大學院醫學士三島通良先生著

皇后
宮御
覽

はゝのつとめ

增補訂正第二版

親の卷　妊婦産婦の心得定價金三十錢（郵稅二錢）子の卷　日本育兒法定價金四十五錢（郵稅四錢）

右は我國無双との好評を博したる日本母子衛生書なり今般增補訂正の上再版したり醫科大學産科婦人科小兒科病室幷に群馬縣高等小學其他諸女學校に於て參考書又は用書として使用するところ少からず

書肆　通三丁目丸善。表神保町中西屋。馬喰町島利。春木町島利支店。通鹽町中央堂。

下六番町　女學雜誌社

廣告定價		
一行（廿七字詰）	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す慈善上の事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

雜誌定價				
一册。	六錢	郵稅。五厘		
十一册。	五拾八錢	郵稅。五錢		（但府內無郵稅前金）
半年分	壹圓四拾三錢		府外は壹圓五拾六錢	
一年分	貳圓六拾錢		府外は貳圓八拾六錢	（同前）

發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

水哉 坪谷善四郎君著

閨秀錦嚢 日本女禮式

製本既成

着金即日送本

全一冊和裝帙入
紙數六百頁以上
密畫百餘個挿入
正價金五十錢
郵税十二錢

一名 婦人一大重寶鑑

松本楓湖。尾形月耕
佐竹永湖 三氏密畫

本書目次

總論 人間に禮節の大切なること

●婚姻 日本の婚姻式○婚姻の大意○婚姻前の心得附嫁入前に訓ゆべきとがら○婚姻の儀式○婚姻の儀式濟て後の心得○婚姻儀式のかざりもの心得○西洋の婚姻禮式婚姻前の心得○婚姻の儀式○婚姻後の心得●支那の婚姻禮式婚姻前の心得○婚姻の儀式○婚姻後の心得

●出產 姙娠中の心得附姙娠中の養生法●出產の心得●產後の心得●子を育つる心得附兒守りへの申渡

●教育

●奉仕 夫に事へる心得●家族に對する心得○舅姑に對する心得並姑たるの心得○夫の兄弟姉妹に對する心得○繼母と繼子との心得○家族及親族の關係のこと附忌服のこと○親族へ對する心得○主人に對する心得

●交際 起居動作の心得●給仕の心得●日本料理饗應の禮式○主客訪問の心得○饗應の禮式○食事の心得●西洋料理宴會の禮式○主人の心得○客の心得○食事の心得○身じまひの心得○化粧のこと○髮の風のこと

●諸藝 詞づかひの心得●作文のしほり○手習のこと○文に用ゆべき詞の心得○文の書き樣附作例○色紙短册書き方並假名遣の心得●和歌の心得●茶道の嗜み○茶の道具並に灰のこと○風爐先手前のこと○風爐點茶平手前のこと爐炭手前のこと○爐點茶平手前のこと●濃茶會のこと○炭手前のこと○四疊半濃茶の節の心得●挿花の心得○あらゆる挿花の心得○種々なる花のいけかた●香道の嗜み香のきゝ樣○十炷香のこと○香道具のこと香の製しかた

●經濟 衣服裁縫洗濯染め樣の心得地合を選むこと○衣服たちぬひのこと○衣服洗濯のこと○染物の心得●飲食料理獻立の心得客式の料理心得略式客まかなひの料理常式料理獻立一般料理の心得○勝手道具取扱心得○住居の心得●奉公人を使ふ心得●病人あつかひの心得○進物贈答の心得●金錢出納並貯蓄のこと○貯蓄のこと○儉約のこと○貯金及び保險のしかた○驛遞局貯金の心得○火災保險の心得○生命保險の心得

●鼇頭 女今川女子訓。女小學。女大學。忠懷いさめ草。婦人六德和解。女五常訓。米國婦人の心得草。やまと言語心得草。女孝經。介婦のいましめ。以上

發兌元 東京日本橋區本石町三丁目 博文館

大賣捌 東京堂 東海堂 上田屋 大倉孫兵衛 水野慶次郎 小林喜右衛門 石塚文海堂 春陽堂

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

水哉　坪谷善四郎君著

閨秀錦囊 日本女禮式

一名 婦人一大重寶鑑

松本楓湖。尾形月耕
佐竹永湖　三氏密畫

製本既成　着金即日送本

全一冊和裝帙入
紙數六百餘頁以上
密畫百個挿入
正價金五十錢　郵税十二錢

本書目次

●總論 人間に禮節の大切なること●婚姻 日本の婚姻式○婚姻の大意○婚姻前の心得附嫁入前に訓ゆべきことがら○婚姻の儀式○婚姻の儀式濟て後の心得○婚姻儀式のかざりもの心得○西洋の婚姻禮式婚姻前の心得○婚姻の儀式○婚姻後の心得●支那の婚姻禮式婚姻前の心得○婚姻の儀式○婚姻後の心得●出産 妊娠中の心得附妊娠中の養生法●出産の心得●産後の心得●子を育つる心得附兒守りへの申渡●教育●奉仕 夫に事へる心得●家族に對する心得○舅姑に對する心得並姑たるの心得○夫の兄弟姉妹に對する心得○繼母と繼子との心得○家族及親族の關係のこと附忌服のこと○親族へ對する心得○主人に對する心得●交際 起居動作の心得●給仕の心得●日本料理饗應の禮式○主客訪問の心得○饗應の禮式○食事の心得●西洋料理宴會の禮式○主人の心得○客の心得○食事の心得○身じまひの心得○化粧のこと○髮の風のこと●諸藝 詞づかひの心得●作文のしほり○手習のこと○文に用ゆべき詞の心得○文の書き樣附作例○色紙短冊書き方並假名遣の心得●和歌の心得●茶道の嗜み○茶の道具並に灰のこと○風爐先手前のこと○風爐點茶平手前のこと○爐炭手前のこと○爐點茶平手前のこと●濃茶會のこと○炭手前のこと○四疊半濃茶の節の心得●挿花の心得○あらゆる挿花の心得○種々なる花のいけかた●香道の嗜み香のきゝ樣○十炷香のこと○香道具のこと香の製しかた●經濟 衣服裁縫洗濯染め樣の心得地合を選むこと○衣服たちぬひのこと○衣服洗濯のこと○染物の心得●飲食料理獻立の心得客式の料理心得略式客まかなひの料理常式料理獻立一般料理の心得○勝手道具取扱心得○住居の心得●奉公人を使ふ心得●病人あつかひの心得○進物贈答の心得●金錢出納並貯蓄のこと○貯蓄のこと○儉約のこと○貯金及び保險のしかた○驛遞局貯金の心得○火災保險の心得○生命保險の心得●鼇頭 女今川女子訓。女小學。女大學。忠懐いさめ草。婦人六德和解。女五常訓。米國婦人の心得草。やまと言語心得草。女孝經。介婦のいましめ。以上

發兌元　東京日本橋區本石町三丁目　博文館

大賣捌　東京堂東海堂上田屋大倉孫兵衛水野慶次郎小林喜右衛門石塚文海堂春陽堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY